

発行責任者  
外旭川病院ホスピス 嘉藤 茂  
〒010-0802  
秋田市外旭川字三後田142

# さんぽみち

TEL 018-868-5511  
FAX 018-868-5577  
HP [www//jkk-sotohp.or.jp/sotohp/](http://jkk-sotohp.or.jp/sotohp/)

## 外旭川病院ホスピスの理念

1. 癌患者と家族のQOL（生活の質）の向上を目指して、チームアプローチによる全人的ケアを提供します。
2. 在宅でのホスピス緩和ケアの実践を継続し、量的質的に前進させます。
3. 地域連携を構築し、緩和ケア提供システムにおける中核的役割を果たします。
4. ホスピス緩和ケアの教育と研究に取り組み、秋田県における医療の質の向上に貢献します。
5. ホスピス緩和ケアの実践を通して、いかに生きるかについてともに考える場と機会を提供します。

## チームの一員として

医療相談室長 吉村 周一郎

私は、平成8年に当法人での勤務をスタートし、介護老人保健施設の支援相談員、居宅介護支援事業所での介護支援専門員、地域包括支援センターでの相談業務を経て、平成31年4月に当院の医療相談室へ配属となりました。この1年、病院スタッフ、患者様、ご家族から多大な学びをいただき感謝の気持ちでいっぱいです。

医療・福祉関係機関において様々な相談援助職がありますが、当院の医療ソーシャルワーカーの業務の一つに入院相談の受付（インテーク）があります。患者様やご家族、関係機関から直接相談を受けるわけですが、患者様を理解するためのアセスメントを適切に行うために、この初期の段階での関わりを私たちとしては特に大切にしています。

ご病気や医療に関する情報だけでなく、どのように生活されて来られたか、大切にされてきたものは何か、生活課題や問題は何か、ご家族や周囲の環境はどうかなど心理社会的な背景も出来る限りお聞きしています。

しかし事務的な聞き取りでは適切に情報を受けることはできません。相手の表情、声のトーンなど、非言語的コミュニケーションの重要性を認識し、相手の気持ちに立った聴き方が重要となります。そのアセスメント情報を医師や看護師、スタッフで共有しチームのケアに繋げていきます。私たちの役割の一つには、この「繋ぐ」ということがベースになり、情報もそうですが、人と人、人と場所、人と時など、繋がり

を支援する上でこの作業を丁寧に行うことが大切ではないだろうかと考えます。

私自身この一年を振り返り、「外旭川病院で働けて良かった」「周囲に支えられて前進して来た」という言葉しか思いつきません。チームの一員として患者様のケアの力になれるようにと実践して参りましたが、私のポジションとしてはまだまだやるべきことは多いと実感しています。それでも日々の振り返りを継続し、時には机に貼ってある社会福祉士の倫理綱領と行動規範を読み返し、自分の立ち位置を確認しながら前進していこうと取り組んでいるところであります。

ホスピス病棟における昨年度（令和元年度）の実績ですが、入院相談件数：962件（昨年度比+122）、外来件数：459件（昨年度比+44）、入院された方：347名（昨年度比+17）、退院された方：351名（昨年度比+22）となっております。今年も、患者様やご家族が安心できる対応を心がけていきたいと思っております。





ご遺族からのお便り



## 外旭川病院ホスピス病棟の皆様

ご遺族から

先生をはじめスタッフの皆様には、お変わりなくお仕事にお励みのことと思います。

さて、父が入院中は誠にお世話になりました。

葬儀、四十九日の法要も終り、時の流れの早さを感じます。

父の死に際しましては、色々と手を尽くしてくださいました皆様にも、十分なお礼を申し上げるゆとりもないまま大変失礼しました。

思えば父も、先生の治療と皆様の看護を受けることができ幸せだったと思います。そして、父ばかりではなく、付き添いの私にも親切なお言葉、親切なご説明をいただき、また、色々とご配慮いただきありがとうございました。感謝しかありません。本来ならお一人お一人にお礼を申し上げるべきところではございますが、書中をもちまして、改めてここに厚くお礼申し上げます。

ホスピス病棟への入院は、私にとっては

初めての事でしたので、正直のところ早急に死を認め、死を受け入れなければいけない場所と思い込み、恐怖の場所でした。しかし、真逆でした。入院直後から温かさに触れ、恐怖に思っていた自分が恥ずかしく思いました。本当に、真心のこもったご対応に、何度救われたことでしょう。

たった15日間の入院生活でしたが、死を目前にしながら、暗くならず明るく父に接することができたのも皆様のおかげで、少しでも最後の親孝行ができたのかな…と思うと、本当に感謝しかありません。せめて半年くらい父に寄り添い、もう少し会話をしたかったです。私たちが病気に気付くのが遅かったのですね…それだけが悔やまれますが、あの痛みから解放されて逝けたのは一番だったと思います。

これからも、ご健勝にてお仕事にお励みくださいますよう、お祈りしております。



## ホスピス病棟のスタッフの皆様

ご遺族から

拝啓 師走の候 松尾先生はじめホスピス病棟のスタッフの皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

さて、母の入院の折には心のこもった医療対応および看護をしていただき厚くお礼申し上げます。

松尾先生からの治療方針のご説明が明確であることや症状が緩和されることで、母は安心して闘病生活を送ることができました。松尾先生と看護師さんたちのあたたかい笑顔や優しいお言葉がけに励まされ、前向きに日々を過ごすことができました。ボランティアの皆様の運営するイベントや講

座に参加することで、心豊かに、張り合いのある日常を過ごすことができました。

そして、旅立ちの時も、常日頃よりお世話になり、全幅の信頼を寄せていた松尾先生はじめホスピス病棟スタッフの皆様へ、ご丁寧にお見送りいただき、重ねて御礼申し上げます。

さらに、患者だけでなく家族の心にも寄り添い、ご支援いただきました。本当にありがとうございました。

最後になりますが、松尾先生はじめホスピス病棟スタッフの皆様のみますのご活躍とご健康をお祈り申し上げます。敬具



## 患者さん、ご家族のお言葉を支えにして

私は、介護補助者としてホスピス病棟で働き始め13年になります。仕事の内容は、入浴介助、食事介助、オムツ交換、ナースコール対応、入院準備に退院後の後片付け、環境整備等々、目の回るような忙しさと体力的に厳しさを感じるがありますが、疲労感よりも、むしろ充実感に近い気持ちでいるような気がします。

午前中は、ほぼ入浴介助。その時患者さんが、「久しぶりにお風呂に入れて…気持ちいい…」、「ああ、極楽、極楽…」「天国だ!」と発する言葉と満面の笑顔。それを見るご家族の嬉しそうな頬笑み。用事で病室へお邪魔すると、なんにつけても、「ありがとう、ありがとう」という言葉。度々、このように感謝の言葉をかけていただくと、少々の疲れは吹っ飛び、「よし、頑張ろう!」という気持ちが湧きあがってきます。



## 春の恵み

今年の冬は記録的な暖冬となり、例年より春の訪れが早くなりました。

いつもであれば、柔らかい日差しが除雪で出来た山積みの雪を日々小さくしていくのですが、今年はそんな冬の終わりを眺めることがありませんでした。

とはいえ、雪国に住む私たちにとって、やはり春は特別な季節に感じます。

たまに、患者さんがご家族からの季節の差し入れを喜んで食べておられるところを見かけます。秋は新米を使ったきりたんぼ、冬はハタハタ、今の時期ですと山菜などでしょうか。みなさん、食を通して季節を感じ、自然の恵みにありがたさを感じて過ごしてこられたのだなと実感する、穏やかな時間が流れます。

私も、あるきっかけから夫婦で突然山菜採りに目覚め、たらの芽やわらび、ミズなどを

## 2階ホスピス介護福祉士 赤間 洋子

このように、生きがい、やりがいを持って毎日仕事を頑張れるのは、患者さんやご家族から頂戴するお言葉や笑顔が大きな支えとなっていると思います。

私には、73歳になる姉がいますが、昨年、癌になり余命半年と知らされました。大好きな姉だったので、残念で、残念で仕方ありません。自宅療養中の姉に電話しても、「ごはん食べたくない」「何を食べても美味しくないと…私は何もして上げることはできず、ただ傾聴することしかできません。

今後、姉のように辛い思いをされている患者さん、ご家族に寄り添い傾聴すること、見守ること。そんな時間を持つように心がけ、心温まる対応をし、残された時間をその人がより良く過ごせるように、関わりを持って行きたいと思います。

## 5階ホスピス介護福祉士 大野 美和子

採りに行くようになりました。しかし私は虫が苦手なため、小さな生き物たちと大格闘となり、何年たってもビギナーのままです。

意外な才能を発揮したのは私の夫で、山菜を採るだけでなく、失敗が多かったわらびのあく抜きも今ではプロ並みとなり、お裾分けの山菜を楽しみにしている人も増えました。今年は暖かい日が多いので、春の恵みも早くなりそうです。

寒く長い冬を耐え、力強く顔を出す山菜に、毎年生命力の強さとたくましさを感じます。大地からいただいたパワーを心身で吸収し、私からも患者さんに優しさを届けたいと思います。





## これまでの活動から感じること

### ホスピスボランティア

ボランティア活動をしているとき、いつもすごいなあと思うことがあります。ボランティアさんひとりひとりが持っている技とキャラクターです。尊敬せずにはられません。行事のとき、日常の活動時、些細な会話の中、いつも感心しています。エネルギーに役割をこなしながらも、患者さんへの繊細な対応。心のこもった接し方、気難しい方をうっかり笑わせてしまうような明るさ。人と人の間になんとも居心地の良い空気が流れます。

もうひとつ、すごいなあと思うことがあります。ボランティアコーディネーターの寺永さんです。年齢不相応の（失礼。）その気力と活動量はナニ？と驚愕。そして、さりげないのに素晴らしいリーダー力に脱帽。皆に慕われ、見事に私たちをまとめ上げています。タダ者ではありません。私たちが活動をより

スムーズに行う為の知恵とご配慮に、尊敬と心よりの感謝を申し上げます。

ボランティアを終えて帰るとき、私はいつも充実感があります。人の役に立てる（気がする）場があるのは幸せなことです。皆様との出会いが私の人生をととても豊かにしてくださっています。

今後も活動には愛情を持って、気負わず、頑張りすぎずをモットーにボランティアを続けていく所存です。どうぞよろしく願いいたします。（下の写真：筆者が司会をしているハーモニカ演奏会）



## 私にとってのボランティア活動

### ホスピスボランティア 山下 陽子

退職を機に、ホスピスボランティア活動に関わらせていただき、ほぼ4年を経過しました。月2回のペースで活動していますが、活動を通していろいろな患者さんとの出会いがあり、私自身たくさん影響を受けています。

カラオケが好きという方と懐メロを一緒に口ずさみ、父母を感じることもありました。ある時は、静かに寝ていた方がオカリナの音色に合わせて曲を口ずさんいるのには不思議な感動を覚えました。

私の話しぶりに特徴があるらしく、「由利郡出身？ ○○地区に行って○○見たことがあるんだよ」と地域のことを話されたり、農業に従事していた方からは「そろそろ苗植え始まったべ。もうやれないなあ。」と田畑を懐かしむ話が出たり、豊富な経験を経た方々とのお話は楽しく、自分を見直したり学んだりする機会となっております。

体調が変化してゆく様子に寂しくなりますが、お花や一杯のコーヒーが心和む一時となってくればと願いながら、○○さんにはこのカップが合いそうと見立ててみたり、また、ギャラリーの展示にも心ひかれたりしております。

ここでは、入院しても普段と変わらずに好きなことに取り組める日常があり、そこに少しでも関わられていることがうれしいです。あの時のあの患者さんから懐かしい思い出に繋がることも多く、それが私の満ち足りた時間となっていることに感謝しております。





## 「お話し相手の出前」をしています

認定スピリチュアルケア師 進藤 伸一

退職したらぜひやってみたくことがあった。ホスピスボランティアである。希望がかなえられ、いま当院ホスピスで週1回、傾聴ボランティアをさせてもらっている。

なぜ傾聴なのか。それは、非常勤理学療法士として週1回こちらに伺っていたとき、病室でのプログラムを終えて帰るとき、また一人になってしまう患者さんが寂しそうに見えたのである。家族や友人が訪ねて来てくれても長くいてくれるわけではないし、テレビや読みものは暇つぶしにはなるけど、そればかりだと飽きてしまう。医師や看護師、介護のみなさんは優しく声をかけてくれるけれども、いつも甘えるわけにもいかない。そんな患者さんの話し相手になって、寂しい気持ちを少しでも和らげることが出来たらと思ったのだ。

傾聴といっても、不用意な言葉で患者さんを傷つけてしまうかもしれない。資格のようなものを取っていれば、患者さんにとってもホスピスにとってもいいと思い、臨床パストラル教育研究センター主催のコースを受講し、スピリチュアルケア師という学会認定の資格を取った。心理専門職が、不安や恐れといった心理レベルの問題を主に扱うのに対し、スピリチュアルケア師は人生や死の意味、苦悩の意味といった精神（たましい）レベルの問題を中心に扱う。以前は、聖職者がこうした問題に対応していたのだが、信仰を持たない人が多くなった時代の要請から生まれた、新しい専門分野といえるかもしれない。

だからといって、いつも患者さんとスピリチュアルな話をしているわけではない。実際は、右のチラシのように「お話し相手の出前」ということで、少しでも患者さんの寂しさが和らげられればという思いで病室を訪問している。

どんなことを聴いているのかというと、これが患者さんによってまったく違うのだ。

週1回の訪問なので、お互いの人となりを知りあうことから始まり、どんな人生を生きてこられたのか、今どんなことを思っておられるのかを伺うと、患者さんは苦勞の多かった人生を生きてきたという誇り、そこから学んだ人生訓、家族への感謝、そして寂しさや不安なども語られる。わたしは、そうした患者さんの思いをしっかり受けとめるよう、ただ一心に聴かせてもらっているのである。

いっしょにテレビを見て雑談をすることもあるし、ウトウトしているときにはベッドの脇に腰かけ、手を握って黙って過ごすこともある。病室に人がいるだけで、部屋の空気は和むと思うからだ。私の話しを聞きたいというときもある。そんな時は、いまやっている農的暮らしやボランティアのこと、現職時代のことなど何でも話している。

私の訪問が、患者さんの気持ちをどれほど和ましていくかわからない。ただ「何をやるかが問題ではなく、どれほどの愛をそこへ注ぎ込むことができるか、それが重要なのです」というマザー・テレサの言葉に少しでも近づけるよう、「お話し相手の出前」をしているのである。

### お話し相手の出前をいたします

ひとりで寂しいとき、つらいとき、話をしたいとき……

誰かに話を聞いてもらいたい、そばにいてほしいと思うことはありませんか。そんなとき、すこしお手伝いをさせてください。きっと気持ちが楽になるはずです。経験の専門家が、あなたのお話にうかがいます。希望される方は、スタッフに声をかけてください。

- ◎ 利用日時 金曜日の午後、1回 30分程度
- ◎ 利用内容 「つらいこと、苦しいこと、うれしいこと、なつかしい思い出など、どんなお話でもけっこうです。あなたのお話を、お聞かせください。  
\*ただそばにいてほしい、というご希望でもおうかがいます。  
\*ご本人の承諾を得たこと以外はお断りします。
- ◎ 医師監守
- ◎ 料金はかかりません。



外旭川病院ホスピス 5階病棟  
認定スピリチュアルケア師\* 進藤伸一  
\*「こころとたましいのケア」に携わる日本スピリチュアルケア学会認定の専門家です。



## ボランティア活動を一時停止している中で思うこと

ボランティアコーディネーター 寺永 守男

新型コロナウイルス拡大で、当ホスピスボランティア活動も例にもれず、3月始めから全面的にその活動を一時停止しております。

このような中、「いろんな行事があると聞いてきたのでそれが楽しみだ」と、期待を寄せて入院される患者さんやご家族がいらっしやると聞きます。しかし、今は「申し訳ありませんが、現在、新型コロナウイルスの影響で、すべての行事を停止しているのですよ。」と申し上げることになります。察するに、いろんな行事等を期待されてきた患者さんが「そうなんだ…」とガッカリされるのではないかと考えます。現状においては仕方がないこととはいえ、申し訳なく、私も残念で辛い気持ちになります。

その反面、我々のボランティア活動もそれなりに知られるようになって、「ホスピスは死に場所で、できたら入院したくないという悪いイメージ」を変えることに少しは役立っているのではと、長い間この活動に関わってきた者のひとりとして大変うれしい気持ちになったりもします。

ボランティアの皆さんの協力が得られない現状を嘆いていても仕方がないので、自分一人でもできる範囲で、コーヒー等喫茶サービスの出前と短時間のお話相手を何とか頑張ることにしました。「〇〇さん、コーヒーですよ」とお部屋にお邪魔すると、「待ってました、有難う」という言葉と同時に、うれしそうな笑顔を見せて下さいます。いつもは、裏

方としての存在のため、このような患者さんの笑顔に直接接することはあまりありませんでしたが、今は、患者さんの笑顔に元気づけられています。

こんな時、ウェブサイトで見つけた幸福度に関する「シカゴ大学での実験」をふと思い出しました。概要は、「96名の大学生を二つのグループに区分し5日間、毎日5ドルを支給。『①自分自身のために使うよう指示された』グループと『②自分以外の誰かのために使うよう指示された』グループ。5日間、毎日自分の消費体験と総合的な幸福度について振り返りを指示された。①グループは、時間の経過とともに幸福度が着実に低下したのに対し、②グループは幸福度が低下しない傾向が明らかになった。」です。

コーヒーを自分で一杯飲む。ああ、美味しいなあと幸せな気分になる。しかし、幸せな気分浸っているのはコーヒーを飲んでいるしばらくの間のみで、それで終わりになります。ところが、患者さんにコーヒーをお届けしたときの「患者さんのうれしそうな笑顔」からいただく自分の幸せ感はすぐに消えることはありません。その笑顔はしっかりと心に焼き付いており、ふとした時に浮かんできます。そして、自分がまたうれしくなり幸福感を味わうことになります。

患者さんやご家族のために、ボランティア活動が一日でも早く再開されることを願っております。

### 編集後記

新型コロナウイルスの勢いが止まらない。院内感染のニュースが県外のあちらこちらから飛び込んでくる昨今である。明日は我が身と肝に銘じ、感染防止に細心の注意を払う。人が集まるといふ場の設定自体が感染リスクになるため、この3月からはボランティア活動は全面中止とさせていただいた。病院職員の県外への外出は禁止され、家族をも含めて体調管理の徹底が指示されている。お気の毒なのは患者さんご家族。厳しい面会制限をかけている。にもかかわらず、そんな病院の対応を理解し、受け止めてくださっている。人生の一大事に無理やり割り込んできたコロナ禍を前にして、思いを抑制しながら協力して下さる患者、家族の皆様にはただただ申し訳なく思う。ケアする責任をしっかりと果たすことで、少しでも償いをさせていただきたいと願う。

(S.K)